

# サビエル生誕五百年



## 巡礼の道

182

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

### 「いのち」への希望

「喪中につき年頭のごあいさつを遠慮させていただきます」というのが十枚を超えた。

以前は祖父母や両親だったが、最近では配偶者や兄弟の死によるものが多い。自分もそんな年齢になったのだと実感せざるを得ない。

先輩の奥方は七十三歳で亡くなられたという。電話すると、死因は大腸ガン、今は一人

派に二万人を超える人が

住まいで一日全く人と話さない日もあるとか。身につまされる。

人間の宿命とはいえず「老いと死」が重くのしかかる。巡礼とは限りある命にどんな意味があるかを考える旅とも言えよう。自分が生きていくことに何の意味もないと思う時ほど不幸なことはない。

カンボジア巡礼、ブノンペンでポル・ポト

が虐殺された現場では文化人や知識人であるということが犯罪として拷問の上殺された。またアウシュヴィッツではユダヤ人であるという理由だけで何百万人もが殺された。

日本でも一九四一年十二月八日開戦の太平洋戦争で三百万人を超える日本人が命を失った。限りある命さえも許されなかった、この不条理。

アンコール遺跡で一番強く感じたことは人間の権力顕示欲と同時



ポル・ポトに虐殺された人の写真、

2009.07.26

に人間の命のはかなさであった。今回の写真はそれをよく表現しているように思える。

人間一人の命からすれば長い、六百年という年月を栄えたアンコール王朝の栄華の跡も大自然の巨木の前では見るべき姿はない。そして、その巨木もやがて枯れ果てる。

過ぎ去り、消えることのない「永遠のいのち」という言葉を最初に聴いたのはベトナム

戦争のころだった。先に洗礼を受けていた妻に誘われ、初めて教会を訪ねた。

「もし全知全能の神がおられるなら、なぜ大勢の罪なき人たちが殺される戦争を神はやめさせないのですか」と問うた。

神父は「人間は神の口ポットではない。人間の自由意志にもとづく行為の結果、確かに不条理なことが起きてくる。神の子である」と

同時に人の子でもあるイエス・キリストも罪もないのに人の手により十字架で殺された。天の父を信じて疑わなかったイエス。エスを神は復活させ、我々にも「永遠のいのち」に生きるという希望を与えて下さった。それを信じていることがキリスト教信仰です」と言われた。

よくわからないまま三十七歳で洗礼を受けた。あれからもう三十年以上過ぎた。今も揺らぐ信仰。しかし「永遠のいのち」に希望を託すという気持ちは強くなった。それ以外に希望がないと言った方が

いいかもしれない。ここまで書いたところで、脳外科の定期検査に連れていった妻から「終わったので迎えに来て」と電話があった。うれしそうな声で「先生から優等生と言われた」という。

私にはまだ妻とともに生きるという希望もある。そして来週は新しい命への希望を与えたいイエス・キリストの生誕を祝うクリスマスである。  
(元山口放送取締役ラジオ局長)



巨木に覆われた遺跡